

---

# トリロジー

松原ちゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トリロジ―

### 【Nコード】

N0219L

### 【作者名】

松原ちゆき

### 【あらすじ】

会社を退職し、郷里へ帰った潮美。

二度と帰らないと誓った郷里で、

再び自分を外に追い出した張本人の男と再会する。

都会の喧噪に疲れた潮美と、

田舎の静寂に耐えられない潮美。

ゆっくりと何か壊れていき、いつしか、毎晩不思議な夢を見るよ

うになる。

## 帰郷（前書き）

ゆるり、ゆるりと書いています。

ひとの心のヒダを一枚一枚書き表せたら、と思います。

## 帰郷

市役所のエレベーターは古く、3階まで昇るのに、みしみしときしんだ。

チン、という気が抜ける音とともに薄黄色に汚れたフロアが広がった。

転出届けは案外記入する欄は少なく、5分で書き終え、5分で転出証明を受けとれた。

手元の転出先の住所をなぞった。

海沿いの町は、脳裏に描いても水墨画のようなタッチでおぼろげにぼやけていた。

二度と帰ることはないと思っていた町。

郷愁の念とはどういうものだろう。

帰郷への拒絶感は、転出届けを受けとってなお増すばかりだった。

引越し作業でくたびれた重たい首をゴキリとならし、駅へと急いだ。

夕暮れの京都駅正面に、京都タワーが反射して揺れていた。  
雑踏。雑踏。雑踏。

吹き抜けのホールをくぐると、いつものJRの喧噪だった。

キオスクで、250ミリリットルのペットボトルのお茶とおにぎりを1つ買った。

大抵昼過ぎまでに、おにぎりは売り切れてしまうのに、今日はあった。

ベージュ色の特急電車はよく揺れた。

がらがらの車内は樟脳の匂いとビールの匂いが充満していた。

赤いスーツケースは母のお下がりだった。

布製で、たくさんの袋がついていて一見便利そうだが

でこぼこしているので、見た目よりも置くスペースを要する。

案の定、足下に置くと、前後左右が狭い座席には収まらない。

中にはパソコンが入っている。

引越し業者へダンボールで渡してもよかったのが、

やはり心配になって自分の手で持ち込むことにした。

車窓から見る景色は、

だんだんと彩りを失って、霧が深くかげる山中にさしかかっていた。

見頃をとくに過ぎた山桜が、ぽつりぽつりと規則性なしに山の裾野あたりに顔をを出していた。

いつの間にか小雨が降り出していた。窓から冷気が侵入し、体を震わせた。

夜は小雨に連れられるようにやってきて、霧の野山をすっかりと包んでいた。

あたりを照らすものは、たまにぽつつとある民家の明かりだけだ。

ゴトン

大仰な音をたてて停車した。駅に明かりはない。

潮美は赤いスニーカーをひきずるように押し歩き、無人の改札を通り過ぎると待合室が目に入った。

季節外れのストーブの周りで蛾がいくつも飛んでいた。

そのストーブの前に、はげた白い木製のベンチが置かれていた。そこに、腰掛けていた男と目が合う。

ものの3秒ほどだっただろうか。

視線がほどけるまでに要した。

同時に、暗闇にクラクションの音が響いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0219/>

---

トリロジー

2010年10月9日06時57分発行